
紫陽花の咲くころに

鈴木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紫陽花の咲くところに

【Nコード】

N2770J

【作者名】

鈴木

【あらすじ】

可愛い恋愛を書こうとして失敗したもの。短いです。

雨が降ってきた。

毎年この時期になると、僕は学校に行く際傘を持ち歩くようになる。ずぶ濡れで帰ってくると母さんに叱られる、と言うのも理由の一つだが本当は傘がなくて困っている子にいつでも貸してやれる男になりたいからなのだ。僕は、物や人の影響を受けやすい性格だ。故、この理想像も唐突に思いついたものだった。当時テレビに出ていた男の子が、「ん」と一言だけ言って傘を差し出した姿に、とても憧れたのを今でもよく覚えている。そんな訳で、この癖がついてしまったのだ。だが、生憎傘を貸してくれと言ってくれるような女の子は現れず、今のところただの「お荷物」となっている。

「隆！」

ふと、後ろを振り返れば小柄な女の子が息を切らして走ってきた。幼馴染のちーだ。千紗、と言うのが彼女の本名で、昔よく一緒に遊んだ。今はもうお互い成長して、会う機会が無くなってしまったのだが……。だからこそ、今こうして彼女が目の前に居ることが嬉しかった。ちーはふう、と息を小さく吐くとニコツと笑って元気？と言った。僕は、うん、まあと言って彼女から顔を逸らす。ちーは、かわいいのだと思う。友達がちーに思いを寄せていると言う話はよく聞かし、実際に仲良く過ごしている姿も見ることがある。その度に、あの頃は楽しかったなと一緒に遊んだ頃の事を思い出していた。

「ちー、どうしたの？そんなに急いで」

「どうしたって、隆が歩くの早いから走ってきたんだよ。もう何回も呼んだんだけど？」

「……ごめん、気が付かなかった。それで、どうしたのさ？」

「うーん、たまには一緒に帰ろうかなって」

帰る？僕と？そりゃまたどうして。たくさんの疑問符を頭に浮かべる僕を他所に、ちーはずんずんと歩き始めた。状況がまったくつかめない僕は、頭をポリポリと掻いてから、ちーを追うように走る。ちーの髪は肩ぐらいの長さで、漆黒だ。前髪をぱっつんに下ろして、それがまた似合う。幼馴染だから、口が裂けてもそんなことは口に出さないけれど。

「傘」

「え？」

「傘かしてよ」

「何で？こんなに天気がいいのに…：必要ないよ」

そう僕が言うと、ちーはニカッと笑ってだからだよ、と言った。

そう言えば、いつ雨がやんだのだろうか…：。

「隆、いつも傘持ってきてるでしょ？でもさす機会ないじゃない。だから今日は私が傘を貸してもらおうの。知ってるんだからね、隆は誰かに貸すために傘を持ってきてるってこと。」

僕の顔がみるみる赤くなった。彼女は何でもお見通しだ。敵わない。ちーは僕の青い傘を差したまま、「晴れの日なら日傘変わりに借りに来てあげる」と言っただけ道を降りて行った。もし彼女がまた傘を借りてくれるのなら、雨は降らない方がいいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2770j/>

紫陽花の咲くころに

2010年10月28日08時29分発行